

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：14601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13889

研究課題名（和文）中山間地域住民の地域移動と二重の主体性：地域活性化のライフストーリー研究

研究課題名（英文）Who revitalize a rural area? The duality of an identity of human resources who move between a city and a rural area

研究代表者

樋田 有一郎 (HIDA, Yuichiro)

奈良教育大学・学校教育講座・特任准教授

研究者番号：50825023

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：人口減少がいち早く進む中山間地域（地方郡部）の住民のライフストーリー研究を行い、地域移動がもたらす地域活性化に取り組む主体性形成と地域活性化に果たす役割の研究枠組みの構築をした。対象地域では、UIターンの促進による地域活性化政策が行われていた。地域移動をした住民は、移動前と移動後の二つの地域で形成された経験や技能を保持していた。ライフストーリー法により時間的、空間的移動の経験を記録し、地域で生まれ地域で育った純粋な地域住民とは違った主体性を持つ地域住民が地域活性化に果たす役割を研究した。また、異なる地域から地域移動する住民が現在の地域にどのように統合されるか誕生から現在に至る過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の人口が減少し始め、過疎化への対応をはじめとして様々な地域活性化の必要性が生じはじめている。日本ではこれまでの地域政策を振り返ると、中央主導で全国一律的な開発や一部の拠点を重点的に開発する形での地域活性化がおこなわれてきた。こうした流れに対して、近年では、地方創生をはじめとして、それぞれの地域が自律的にオリジナルな文脈で地域活性化をおこなうことが求められる傾向が強まっている。そうした中で、重要視されるのは、地域活性化を主体的におこなう人材であった。本課題では、そうした新たな局面を迎えた地域を活性化させる地域人材の機能と生育過程に着目した。

研究成果の概要（英文）：I conducted a life story study of residents in a mountainous region (rural county area) where the population is declining rapidly, and developed a research framework for the formation of independence to engage in regional revitalization brought about by regional migration and the role it plays in regional revitalization. In the target area, a regional revitalization policy was implemented by promoting UI-turns. Residents who moved to the region retained experiences and skills that had been formed in the two regions before and after the move. The life story method was used to record the experiences of temporal and spatial migration, and to study the role of local residents who have different subjectivities from purely local residents born and raised in the local area in the revitalization of the local area. The study also clarifies the process from birth to the present of how residents who move from different regions to the region are integrated into the current region.

研究分野：社会学

キーワード：地域内よそ者 過疎地 地域活性化 地方創生 地域移動

1. 研究開始当初の背景

日本の人口が減少し始め、過疎化への対応をはじめとしてより一層の地域活性化の取り組みの必要性が生じはじめている。

日本のこれまでの地域政策を振り返ると、中央主導で全国一律的な開発や一部の拠点を重点的に開発する形での地域活性化がおこなわれてきた。こうした流れに対して、近年では、地方創生をはじめとして、それぞれの地域が自律的にオリジナルな文脈で地域活性化をおこなうことが求められるようになってきた。

とくに、農村部では、こうした流れが加速している。格差への対応といった都市化の必要性の問題から「個性」「自立」という個性的地域化(小田切 2021)といった問題の焦点の遷移がなされていることが長らく指摘されてきた。あるいは、人口増を前提とした外発的な発展から地域資源を生かした内発的な発展と先進的な少数社会(過疎問題懇談会 2020)の問題へと焦点が移っていることも指摘されてきた。こうした議論の中では、どのような人材が地域活性化をおこなえる人材(地域人材)かを明らかにし、そうした人材の育成(地域人材育成)の方法を検討することが重要視されている。

本課題では、地域活性化をおこなうアクターを分析することでこうした問題意識の一部に応えることを試みた。とくに、住民が地域移動をおこなうのが当たり前となっている離島・中山間地域(過疎地域)を対象に分析をおこなった。

2. 研究の目的

人口減少がいち早く進む離島・中山間地域の住民のライフストーリー研究(桜井厚)を行い、地域移動がもたらす地域活性化に取り組む主体性形成と地域活性化に果たす役割の研究枠組みを構築することを目的とした。対象地域では、UI ターンの促進による地域活性化政策が行われている。地域移動をした住民は、移動前と移動後の二つの地域で形成された経験や技能を保持していることが予想された。このようなハイブリッド性は地域人材としてどのような意味を持つかについて明らかにすることを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

これまでの調査や形成されたラポールに基づいて離島・中山間地域を中心としたフィールドで、地域活性化を行う住民の活動等やその主体性等を明らかにするための調査等を行った。

4. 研究成果

調査対象者の分析を通じて次のことが対象地域で生じていることが示唆された。

調査対象地域である離島・中山間地域は、地理的な隔絶性(奥地性)が高いため、内と外の関係が立ち現れやすいが、近代化以降、住民はライフコースの様々な段階で、地域移動を積極的に行うことが当然視されている地域であった。そのため、住民内部には、生まれ育った地元の地域の住民としての感覚・技能・行動様式(地元住民性)と他出した先の都市の住民としての感覚・技能・行動様式(よそ者性)の両者が存在していた。両者は葛藤しながら融合され「地域内よそ者」と呼べる両者の特徴を併せ持つ住民の性質を対象者は持っていた。住民は、親世代のやり方や協調を重視する地元的な感覚と、親世代のやり方を否定して都市的な視点から革新を行おうとするよそ者的な感覚を慎重に使い分けながら、現状を「少しツラす」ことが地域活性化や地域の変革を行う上で重要であることを理解していることが示唆された。

これまで、地域活性化は、住民のみにしか不可知な地域的な価値を用いた内発的な発展を重視する立場と、よそ者・若者・馬鹿者に代表されるような外部性による発展を重視する立場から対立的に論じられてきた。本課題が、検討した「地域内よそ者(敷田 2009)」の議論は、こうした二項対立的な議論に、あらたに住民自身が地域的価値とよそ者的価値の両者を持ち込むという視点の重要性を明らかにしようとした。このような問題意識の元、一部の対象者のライフストーリーを分析し、中山間地域の住民が地域移動を行う中でどのような主体性が形成されたかを検討した。

こうした地域内よそ者としての地域人材像はとくに家業継承者の分析において顕在化していることが示唆された(樋田 2020)。このことについて、樋田(2020)を踏まえて次のように要約される。

地域活性化の主体性を分析した中田は、農村文化の都市文化に対する相対性を強調し、地域の独自性を唯一理解する住民と理解不能なよそ者の対立を強調する(中田 2001)。これに対して調査対象地域の家業継承者は、地域住民としてのアイデンティティと同時に、よそ者としてのアイデンティティも構築していた。このことについて、調査対象地域での地域活性化のエンジンは、よそ者に不可知な地域の独自性を共有する同質性に加えて、都市での経験という外部性の双方を備え合わせた地域内よそ者性であること、およびその意義を検討した。

急激に進む過疎化や都市文化の流入を受けて家業をめぐる状況が変化する中で、地域からの

他出者は家業継承のために地元地域に U ターンするかどうか、継承をするならどのようにするかについて葛藤してきた。結果として家業を継承した者は、他出先の都市での経験を資源として家業変革を行ったと述べていた。

家業継承者は都市でのよそ者として獲得した主体性、地域内よそ者として獲得した主体性を持って都市化、近代化、高齢化や人口減少といった過疎化に関わる地域社会の変動に対峙していた。こうした地域内よそ者性は、地域構造から生じた地域の問題が家業に関わる問題として現れ、そうした問題に立ち向かうための家業変革の主体性として継承者達の語りに現れていた。

家業の変革に際しては、外で身につけた経験（よそ者性）と共に、地元地域の考え方や価値観を理解していることや地元のネットワークを利用できるという地元住民であることの強み（地域住民性）を組み合わせ同時に生かすこと（地域内よそ者性）が重視されていた。「帰ってきて仕事がない」は調査対象地域でよく聞く言葉であるが、家業継承者は、親世代と同じことをしても、都市のやり方をそのまま地元地域に持ち込んでやっていけないと認識していた。こうした中で、家業継承者には、地域移動を経て地域内よそ者として家業の変革に寄与する主体性が形成されていたことが示唆された。

また、地域内よそ者は、単に U ターン者であること“のみ”から捉えるべきではないことが示唆された。というのは、移動経験と時間経験の中で地域内よそ者性が構築される過程では U ターンの意思と時期、都市と地元地域への考え、家業への考えややりたいこと等、様々な葛藤が見られたからである。地域住民性とよそ者性の両者を地域にあわせて高度に融合させた主体性が地域内よそ者性として見られた。

さらに、地域移動を通じたよそ者性の獲得と地域住民性との融合は対象地域では現在の過疎の文脈を超えて汎時代的な変革的家業継承の主体性形成の在り方の可能性がある。こうした汎時代的なハイブリッドな主体性は、もともと地域移動が戦後早い時期から行われてきたこの地域の家業継承の変革に影響を与えていたが、現在の過疎化の中での家業継承の場面では地域活性化に関わる主体性として構築されたと解釈された。

先行研究では、よそ者に対して不可知な地域住民のサラブレッドな主体性（住民の固有性）を対置した（中田 2001）。これに対して家業継承者を対象にした本稿のライフストーリー法による知見は、家業の革新や継承の文脈での地域活性化の主体性はハイブリッドな存在である地域内よそ者性であった。本研究では、こうした性質が、過疎の社会状況下で生じる問題に向けられ地域内よそ者の主体性として構築されることに注目した。こうしたハイブリッド性に関わる性質こそが対象地域の住民の固有性の一側面と強調され位置づけられた。

これまで、限界集落の存続はもはや村落内部の論理ではもはや不可能であるという議論（佐久間 1999）がなされてきた。対象地域の奥出雲町でも自助自立路線ではなく外部の援助の必要性が主張された（長野他 2012）。こうした中で、地域内よそ者の越境の議論は、地域活性化の実効性についてさらなる検証の必要性を残しつつも、住民自身が外部性を持ち込み融合するという分析視点を提供した。地域内よそ者の主体性は地域活性化の主体性の一つのタイプとして位置づけられるとともに、過疎化と奥地性を社会的コンテクストとする中山間地域のコミュニティの地域人材の論点の一つとなりうるだろう。

引用・参考文献

- 樋田有一郎, 2020, 「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性 島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して」『村落社会研究ジャーナル』26(2): 1-12.
- 中田英樹, 2001, 「開発理論としての《活性化》言説の構造分析試論: 言説空間において住民はどのように主体たり得ているか」『村落社会研究』, 7(2):1-12.
- 長野忠・「奥出雲からの挑戦」出版会, 2012, 『奥出雲からの挑戦 よみがえった過疎の町』文藝春秋企画出版部.
- 小田切徳美, 2021, 『農村政策の変貌 その軌跡と新たな構想』農山漁村文化協会.
- 大野晃, 2005, 『山村環境社会学序説 現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会.
- 佐久間政広, 1999, 「山村における高齢者世帯の生活維持と村落社会 宮城県七ヶ宿町 Y 地区の事例」『村落社会研究』 5(2): 36-47.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 桜井厚・小林多寿子, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.
- 敷田麻実, 2009, 「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9: 79-100.
- 総務省過疎問題懇談会, 2020, 『新たな過疎対策に向けて 過疎地域の持続的な発展の実現』.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 樋田 大二郎、樋田 有一郎	4. 巻 第65号
2. 論文標題 地域学校協働にとりくむ高校魅力化改革：地域学校協働での高校生の学びと役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育研究	6. 最初と最後の頁 115～132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/21749	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋田 有一郎	4. 巻 第26巻2号
2. 論文標題 地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性－島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 村落社会研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9747/jars.26.2_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋田 有一郎	4. 巻 第27号-2
2. 論文標題 高校魅力化における「地域の特色を生かした教育」のあり方を考える：学習目標と学習効果の整合性に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊	6. 最初と最後の頁 51～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 樋田 有一郎	4. 巻 2
2. 論文標題 愛媛県立今治北高等学校 大三島分校 生徒インタビュー（特集 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域人材育成研究 = Regional Human Resource Development Studies	6. 最初と最後の頁 6～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013406	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樋田 有一郎	4. 巻 1
2. 論文標題 愛媛県立三崎高等学校せんたん部生徒インタビュー (特集 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域人材育成研究 = Regional Human Resource Development Studies	6. 最初と最後の頁 6~33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20636/00013405	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 樋田有一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 玉川大学	5. 総ページ数 41
3. 書名 「社会学」学修指導書 初版	

1. 著者名 小泉勇人・茂木謙之介・大嶋えり子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雷音学術出版	5. 総ページ数 172
3. 書名 オンライン授業の地平 2020年度前期の授業実践報告	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------